

## 令和4年度 第1回・第2回新任教員研修会 開催

「教員－学生間の授業に関する対話」は、多様な学生が本学の教育を通して成長し能力を伸ばしていくための、重要なプラットフォームの役割を果たしています。具体的には、教員とのコミュニケーションによって学生の心理的安全性を構築する、教員が学生の特徴を考慮した授業構成を考える際に履修者の状況把握をするための情報を収集する等があげられます。本学では、新任教員に対話の取組みを深く知っていただくことを中心に、全2回の研修会を実施しています。

4月27日(水)開催の第1回新任教員研修会では、新任教員の先生方に本学の教育について知っていただくため、教育支援研究開発センターの活動内容と、本学で実施している「教員－学生間の授業に関する対話」の取組について説明しました。研修会の後半は、学生との対話方法に関するアドバイスや、新任教員の質問や悩み等について、同センター運営委員と新任教員による意見交換を行いました。



新任教員研修会の様子

また、6月1日(水)開催の第2回新任教員研修会は、第1回に引き続き「教員－学生間の授業に関する対話」の実践をふまえたグループワークを実施しました。実際に対話に取り組んでみて感じたことや、コロナ禍の課題など、先輩教員を交えながら学部を越えて情報を共有しました。

本学では多様な学生を受け入れており、教員との対話は学生が力を伸ばしていくうえで重要なファクターとなっています。学生が成長できる大学として、対話を通じて教員と学生がより良い教育を共に創りあげる文化の醸成を目指します。

### 【第1回新任教員研修会の話題】

- 対話の実施方法
- moodleの活用方法
- 双方向的な授業のための工夫
- 試験、小テストの実施方法について
- 学生に対する印象 など

### 【第2回新任教員研修会の話題】

- オンライン授業のコツや手法
- 対話の実践で困ったこと
- 対話シートの回答率をあげる方法
- 対話で得たデータを分析する方法
- 学生の特徴や傾向 など

## 令和4年度「京都産業大学教育プログラム支援制度」採択結果

「京都産業大学教育プログラム支援制度」は、本学の教育の質向上を目指し、授業科目の開発・運営、正課の授業に係る基礎調査や試行的取組等のFD活動に対する支援を行う制度です。令和4年度は、公募・審査した結果、下記の2つのプログラムが採択されました。

本制度では、特定の科目、学部等での取組が他の科目、他学部でも活用できるといった全学展開が可能な試行的、発展的な活動を支援することにより、全学的な教育力向上に資するような波及効果のある取組を支援することをねらいとしています。本制度の活用により、本学の教育改革のさらなる発展および推進が期待されます。

取組名称	申請代表者
観光者の行動誘導による混雑解消の試み	情報理工学部 棟方 渚 准教授
大学の地域資源を活かす課題解決型教育プログラムの開発	生命科学部 西田 貴明 准教授

## 第1回全学FD/SD研修会・新任教員研修会 開催報告

教育支援研究開発センターは、本学の教育の質向上を目指し、FD/SDを推進するための全学的な研修会の開催や「京都産業大学教育プログラム支援制度」の運営を行っています。本号では、令和4年度に開催した第1回全学FD/SD研修会の概要、第1回・第2回新任教員研修会の結果報告、令和4年度「京都産業大学教育プログラム支援制度」採択プログラムについてご報告します。

なお、第1回全学FD/SD研修会報告では、講演者とコーディネーターとの対談をクローズアップしていますので、より理解を深化させる一助となるようにご活用ください。

### Contents



〈FD/SD活動の推進〉  
 令和4年度 第1回全学FD/SD研修会 開催



〈FD/SD活動の推進〉  
 令和4年度 第1回・第2回新任教員研修会 開催  
 令和4年度「京都産業大学教育プログラム支援制度」採択結果

# 令和4年度 第1回全学 FD/SD 研修会 開催

## 講演 学修者本位の教育の実現を目指して ～ From my course, to our program ～



講師：深堀 聡子 先生  
(九州大学 教育改革推進本部 教授)

本研修会は、本学のカリキュラムマップ・アセスメントプランの見直しとブラッシュアップを図り、カリキュラム改善と学修者本位の教育の確立へと繋げていくことを目的とし、5月11日(水)に教育支援研究開発センター・学長室の共催で開催しました。「学修者本位の教育の実現を目指して～ From my course, to our program～」をテーマに、深堀聡子先生(九州大学教育改革推進本部教授)を講師としてお招きし、ご講演いただきました。当日は、新型コロナウイルス感染症対策を行ったうえでの対面とオンラインでのハイブリッド開催とし、後日配信のオンデマンド視聴参加者も含め、103名が参加しました。

## ◆◆◆ 講演要旨 ◆◆◆

九州大学では、教学の考え方として「学習システムパラダイム」(=教育目標・カリキュラム・教育実践・教育評価の整合性)、「教学は教員の協働作業 (From my course, to our program)」(=学位プログラムの学修目標と授業科目の整合性)、「学修成果に基づく教育」(=学生が授業科目を終了/学位プログラムでの学びを修了した段階で、何を知り、理解し、行えるようになったかに関心を向ける)があります。これらに基づき、「学位プログラム」と「授業科目」それぞれのサイクルと、サイクルを整合させる中核的な役割を果たす「エキスパートジャッジメント」によって、教学マネジメントの枠組みが形成されています。

本講演では、認証評価や執行部のリーダーシップではなく教員が自分の学生のためにオーナーシップを持って教育を行うことの重要性和、そのために必要な教学の考え方、教学マネジメント、カリキュラム・マップ、アセスメント・プラン、シラバス、ルーブリック等のツールについて、九州大学の実践事例に基づきお話しいただきました。

## 参加者からの声

「学修者主体の教育について改めて知見を確認することが出来た」  
「質保証について深いお話をいただき大変刺激になった」  
「カリキュラムマップやシラバスの検証・分析にあたり、九州大学の取り組みが参考になった」

## 対談 深堀 聡子 先生 × 川島 啓二 先生

講演後は、川島啓二先生(本学 共通教育推進機構 教授)がコーディネーターを担い、深堀先生との対談を行いました。九州大学で実践されている「認証評価のために教育の進め方を決めるのではなく、執行部がリーダーシップをとって決めるわけでもなく、教員が学生のためにオーナーシップを持って教育を行う」「教育と研究の往還的關係」という教学の考え方・九州大学の教学マネジメントには、「From my course, to our program」「エキスパート・ジャッジメント」といったキーワードが深く関わっています。

対談の中でこれらの言葉をより掘り下げながらお話をいただきましたので、その部分を抜粋してご紹介します。

### 川島先生：

「学位プログラム」と「授業科目」をつなぐものとしての、「エキスパート・ジャッジメント」という概念について、詳しく聴かせてください。例えば、プロフェッショナルではなくエキスパートである理由はなんなのでしょうか。また、大学教員の教育的専門性について、欧米ではかなり蓄積がありますが、そのあたりの文脈とエキスパート・ジャッジメントの関連性、最近ではこのエキスパート・ジャッジメントをどうやって涵養していくかについての方法論など、その辺りのお話を伺えればと思います。

### 深堀先生：

「From my course, to our program」も、エキスパート・ジャッジメントも、「Tuning」という取組が、米国内で実践される中で語られてきた言葉です。Tuningと

は、1999年に欧州で欧州経済圏を実現していくための労働市場の共通化が求められた際、それを供給する高等教育の役割のひとつとして、欧州高等教育圏の構築が目指されるなかで着想されました。欧州の様々な国の多様な高等教育制度を共通の枠組みの中に位置付けて説明することによって、高等教育機関の質が同等であるか否かを可視化し、学生の流動性を確保しようとする動きです。2000年に始動した欧州Tuningは、この欧州高等教育圏の実現に向けた大学の貢献として位置付けられています。学問分野別参照基準に基づいて学位プログラムの学修目標を定義し、学修目標に対応する授業科目の到達目標が達成できたかどうかに基づいて成績評価を行い、最終的に学位授与を行っていくことを、欧州の全大学で共通して実現しているという取組です。

この欧州におけるTuningの取組は、2010年ごろ、米

国でも注目されることになりました。

米国は世界の高等教育をリードしていく高等教育システムを有してきたのですが、卒業率の問題や米国の経済不振等を受けて、高等教育システムの妥当性を見直すようになりました。その際、欧州の大学の教育の取組を参照しようじゃないかということ、高等教育研究のトップリーダーたちが呼びかけたのです。米国には授業科目の教授法の専門性についての研究の蓄積がありますし、教育専従教員もいて、教育の専門性を高める取組が活発なのですが、授業科目のミクロレベルの改善だけでなく、学位プログラムのミドルレベルの改善も必要であることが注目され、その中で、学位プログラムと授業科目を繋ぐ教員の力量としてのエキスパート・ジャッジメント、学位プログラム全体を俯瞰しながら教える専門性の重要性も強調されたのです。だから From my course, to our programであり、エキスパートなのです。

エキスパート・ジャッジメント、教育のプロフェッショナルではなくて、ようするにディシプリンのエキスパートという意味なのですね。ディシプリンのエキスパートとしての判断力を涵養することが、教育の質向上にとって不可欠だと考えられた、そういった文脈があるということです。

### 川島先生：

それは、今まで日本が取り入れてきたFDの文脈とかなり違った話として出てきているという理解でいいのでしょうか。



### 深堀先生：

1990年代に教授パラダイムから学習パラダイムに移行した際には、確かに教授法の専門性というのが重点的に問われたんですね。どういう風に学生が理解できるように教えるのかということが。色々な教授法のFDが導入されたのですけれども、2010年代くらいからは、それをシステムとして確立していくこと、学位プログラムと授業科目の整合性を実現していくことが強調されるようになりました。そうした取組には、必ずしもテニユアではない教育専従教員だけでは不十分で、ファカルティの中核を巻き込んだ動きに展開する必要性が認識されるようになったのだと思います。エキスパート・ジャッジメントという言葉には、ファカルティの中核がプログラムの学修目標を達成するために、いかにチームとして動いていくかを重視する視点が含まれています。

Tuning：学位プログラムを設計・実践する「方法」を共有することを通して、大学教育の「等価性 (comparability)」を高めていくことを目指す取組。(国立教育政策研究所「チューニングとは何か」<https://www.nier.go.jp/tuning/about.html> (参照2022-09-01))